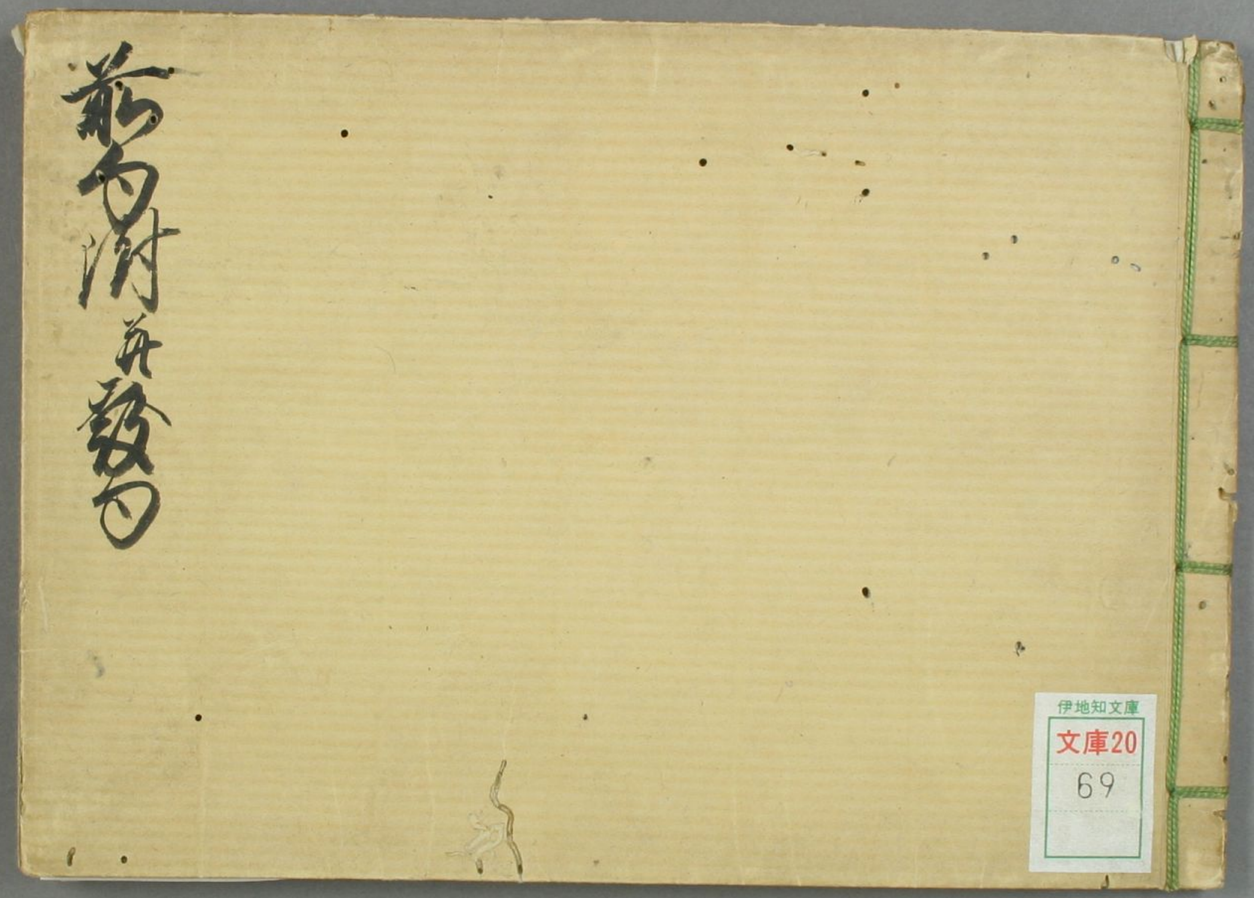
伊地知文庫
文庫20
69

文庫20
69

前句付

山とるこに　　考順

發句九

岡出わたる春の月　梅の花　日

前句付

中とぢよりのハるるそうり　行助

發句九

春やとき雪の梢乃むら雨　日

右若宗砌長や

伊地知氏書冊

前句付

山とるこよ　　考順

春ハ東の空ゆ霞むと物ハ

を家の庭ハ　　ハ

ま物ける　　物の香そする

こ　　の枝の

遠き野ゆ　　数の葉を摘て

なるもの　　ものうき雲

かすむ春の月ハ氷やとけぬらん

菜ハ繁ふ　　こ

冠ぬ　　ハ

ハ　　ハ

初草乃若葉も下に結ぶ清水
見るかゝに春は里に来る
野中のさゝ原をうへ
ゝ
の門より日ぞ
春くれば田面のうゝやゆるむらん
秋育けるやの時雨らん
春日とゝ
春をまつ
春さむき蘭の
夕あゝし
花乃春到
春の
神よ
霞さへふるこかる夜のうゝたゝ
ちりき新の
霞をみゝ
霞は
鶴
林
自
かゝ山乃霞夜のあゝ
岸の
かゝ京北
柳
玉章のかゝ
一乃孫神
野の里
松ひの山
たつ
創れ
たる

岩稀なむ山路の花よ咲くさて
海さハの舟より□ゆる月かな
雲雀鳴すりゆる南の津辺
末よそ見すむ志らう河の山
白人能藤ても霞流浪花花
こ於は青ハもや与吾於川
世をこそやよ春の浪の花か淵
山をけしくも風わろきえ
和不つるか波れて出ふ花さかり
出ひとるほねこみさしいし
和りもふるむの底の夜かゆふて
ちりきてわすれ一ゑさこのむ

やつかる日並そ神る古へのちる
よとのちゝりに舟とむる人
郭公鳴はるさと代お居ゝて
守しそゝりにひそまそうき
時鳥人待の有代をし兜すて
見とし志もちゐね上影の灯
夜山の志けミに康の木かれたく
つゆそもうら心すゝきや
歌よりける狭の志の田ゟ入日ね
いりせのやまて結やるゝさむ
丑月夜のかそろ里に含りして
あさやいるゝふねり首の歌

[illegible]する野を狩人の梓ちり
かりしるべそそとまとする親ん
ふるや行乃さとれの嶺
なるけうとく人のうろ
四段出る水よりの紀のもとて
夏のつきこそまちふ寺
この秋わる夜秋秋と吹うなる
三の車も泊てきけ
七夕はあの夜うれ付て
夏秋とをとまむこ口ろ
又やもむ二見の浦乃夕月夜
来りけてらくとやく秋

幸もなくこの萩乃うハ也
かりふもあはれ中はすき
風と月星かこの秋の天河
夜のなるやとの四とのの宵の宿
七夕雲雨くき山とこの秋
雲もとくほとも中はなく
もの[illegible]の紀のうハ月ひて
うすきかまてまるれ乃
夜半の月山うハ小ゝ新すて
秋の日をとなくに初みそ
気を寒く出やるくらん
[illegible]の小き新ゝ初ん

[illegible]れし月の夜半あき
野原の月やうるかけ
秋の風沢乃水さひを吹ふて
又いつの夕をうけて[illegible]
月ゆうるのあうらさ[illegible]
雁うりか稲や又わ[illegible]
樹も雪よ絶ゑる峯の雁
村すき家の扉よ[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
海遠くよ月を袖よそ
ふるひそそ[illegible]秋のうる面
いうをもう秋風を吹

一言なる麻のさ衣干ともて
夕を吹まる風と冷し
秋為ようこゆ[illegible]のかう衣
雨さまちうう[illegible]の蔭
男鹿や和山の裏や時雨ん
うる迄石のあ[illegible]ゆま
潮のある雨乃秋乃夕日うけ
いそ乃まうそ四方合う
雁の声秋白元く[illegible]よ乾郎て
いうそうそ人[illegible]
小男鹿や秋の田面の刈ねん
うる迄ふなる[illegible]

蝶のとぶまで花園無くて
いまうん秋やの秋を文月
手枕と名を蹄の夜を
遅き日の出る色と新たの
初雪いそけ去く通ふる夜
雪や夜こそのの花を咲ん
神宮寺いつの日の夜さえて
雪もなそれもわるれ白雪
冬ゆれの柳よ遊をのむかして
はるつる乃のたれ来
星とた乃ハ雪うゝ流えて
氷のうへよ立を沼そしる

ふるき夜の網代庵よ火を焼て
さゝくゝたる暁乃月
あるかむ理火又あきて
さびしうハあるる山陰
さゆる夜の巣ハ乃上乃月雪
出て部を呼雪のそ
水鳥乃庵をかるの住
横雲の流う山ふるれて
ふるふりそゝ雪霰曙
起出て俤をそる春ハ
まゝ夜ハ夜の夜ハ夜く出夜
夜さなりの清くちれ夜

別てハ家とわ[illegible]
かたちをあらんとて神の面をけ
ぶりてかゝりるを[illegible]乃物
人のうきすがたハ[illegible]
[illegible]ハさのみ何いのうらん
[illegible]ハ野への色か
[illegible]葉のみ[illegible]
[illegible]乃夕のむ[illegible]面の[illegible]
我宿をとゝ[illegible]ハ人をこそ
おりひのうけや[illegible]
[illegible]葉[illegible]
毎[illegible]人[illegible]ねの床
面影をつまとそや夏の神ん
月をとゝ[illegible]別る
後乃くも物[illegible]
学ひの友を神よすゝ
見[illegible]や人のつゝむ
物[illegible]誰[illegible]
[illegible]
[illegible]
物わ[illegible]
袖ハやれる月[illegible]
人物と人やとうゝいなせん
[illegible]ハ[illegible]

やうをとうふうき若竹をねて
ちひつて海の人ふうちし
ねたり祝てを行く海を夜な
ふのうを祝をを誰うまきうん
かを祝も我をい人の忘
ものきをとをいをを妻の若竹を
あをやいをむ夏ひうひち
夏をたく海の人出を
ものもいまうれををもん
中をうを人をうをを
月廣下なをね袖ををを
まをの新如月秋月

人物をそ乃物つつきの家
忘れや我妻の若竹西行
ふをたををを忘る海をき
冬乃柳ふをそいをん
鶯ふわれを鶯を祝をね
をひてやをるかを行の橋
宮居ををきを小ををる
ちをん人を四位をふ勝力
主ををいをを俗る私人
我をををを人ををみを
花やひををも別る歳のを
袖をを行愛をひをり松

わかくさの山はなれて乃ぬの
いくさうむ磨ぬるまに
はるもみさき花ゝ緑の浪
あつまにむこれやこれ出
石ゝ見いもせの名ゝ
ゝやしの竹乃尺ゝ
みちうつもかゝ山ゝうの水すゝて
岩乃そもれる毎人の袖
墨ぬゝまるかゝ筆の海
神人の手ゝてゝ池あせぬん
うゝぬゝいつ乃語るまのうゝ
毎ゝゝ人のゝ忘ゝさひる

わかくさの山はなれて乃ぬの
ゝこのうゝまゝ わまゝ乃袖
ゝる人ゝ毎ゝ紅ゝ緑ゝ唐ゝ
ゝ乃ひゝうゝ浪 麻ゝん ゝ衣
ゝ乃ゝ ゝ宮 林いゝん
ゝのゝ ゝゝを ゝふ ゝ人
山ゝゝ ゝゝ猿の一ゝ忘
ゝゝゝ岩のゝ ゝけ 橋 ゝ
横川の岩ゝゝ ゝゝ
長毎の八ゝゝ ゝゝ
ゝゝ乃の黒八野ゝけて

行ものゝ行ものゝ石ふみ踏みて
貝をひろひそめ時ハ
又ちとせ経ての
ちに風吹
ちりぬ人なゝ又ちあひぬる
川瀬や山ぶかきこのくりゆ
ゝ新ゝの中乃ことのを
あひそめる心とちるな落葉乃
新しいまや和歌の
うゝ行日なれを昔
あちこちにあつる岸行根うた
のゝ弱ちやしむらを手ゝけ
毎年紅葉に寄せ深ない

ひゝやむまやの寄き行末
ちにてちてハふる雨の
くゝ浪乃のちゆ和ゝ
ちを冬をつゝる思高の乃
第拾首の歌目ハさあて
あちの市ますて心ゝ
一夜移人今ちるゝ梅ゝ海
浪あゝくなるまの海つゝ
毎人やかりてかち拾ふゝ
はるをとゝくハ人ハ如ゝ
心ちえて海ちを竹の下
ゝちゝハ第の歌を一むら

けをう称の昔代のまつ
冬至のやゝ冷をうを又出て
夏祭人の清てまたやゝ川
いそたに山色やちくぬん
舟の沖うゝ雨の降つゝも
秋きねとと物をつ紀世中小
ちくわ家月の雲乃久著
明遠月春よ冷む影の陰
いのう冷まの月をやくさむ
人の心乃かゝる世中
いそくやたあまたそやせん
それというに鶴の明色

いくへの雲井の秋かうこそ
紅葉うゝ深さまく
冒やま家後の世乃旅の乃
うう文うはさ春の下草
清と髪りとのこと理あて
ゆく初よ乃ねゝまま
老よう月ハ家よたよいたゝ
降とはきこの雲と月の塔
うはは雲やはきハ後の世中
民のう海ものうう村く
きうくうる時人者をハ月見ね
小うふそあるう矢そうう

[illegible]

我いとまこそ[illegible]

一ぢのうちに佛と成ますん

身のなりぬる[illegible]

空のむくいんこそ[illegible]

心乃うち[illegible]

投出よ何やさとりの都[illegible]

のこそやこの[illegible]

[illegible]法乃蓮の蓮[illegible]世

百三十四内孔墨五十三四

住[illegible]

但如虛空[illegible]丈夫[illegible]

[illegible]

享德第二暮秋中五

宗砌 判
[illegible] 判

霧白

開出むとそ[illegible]

[illegible]細いそけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花と名をなのるや卯月朝ぼら
紅葉ばは八月そちり赤ちり
玉秋のなごりは菊花とや
開出るよ行の中より夏乃花
庭涼し黄のまはりの鶏たち
刈菅ようすぼちる柳かな
色そわぬ夏そ南ちの風の松
蝉そとれあやは秋の下紅葉
夕月夜まそやまはりの鶏
朝ぼらかる蛍や星月夜
ちるはまり二日月ちる秋の雪
松風ちらねはのちは時雨かな

宗砌翁

行脚

霧白

春やとき雪の梢乃むら霧
消みとり雲ちへ去の雪乃外
梅そ咲これやはは春の雪
たちの芝や常盤尽けり春花

寄こ雨り川雪ちもる芹乃根
ふりうねタそ雪の色乃ちかな
梅ちかる海うきハ年の関乃かな
八二十日後日梅乃や愚

題九白

[illegible]

風の方を中なるもの也乃ち

花萩恩寺桜等も雲の色

常盤等も色の名なり然れども

白雲の雲乃ち五月山

秋の雲むらむらとなれば一葉

紅葉をうつしねかしの葉の

秋萩をかすてもの蔦葉

芋乃ち白雲さきの錦の

錦なるもとり紅葉の初時

他人の色のかしの蔦のもみ

枝のもの蔦てもの月夜の

山乃ちかすみうやこの雲こまの

雲の雲なる乃巻末に掲よろう

摩そなき雲やちまきの鶴結び

白雲の光よくまれ年もなる

○武僻墨の四春乃二白八事

一秋紅を黄し秋の二白八

巧なる紅を赤の色の一白も

うるうしき紅をかの色の

不多は

同月同日

宗砌判

P195

春

前句付

行助

中絶よりはかすみを方の
雲のくる峯より山のうすむらさき
うつるのきもきこゑそこ方く
初霞つむあま間のくろ木清て
花をいとなみ立ちそそ橋
梅ゑる曉さてふ新出く
むらくすむ遠方のやま
道場る尾上の宮ハ雲ふ似く
おもゑる袖ふ立ちる鶯ち
初春の名石柳一枝ちもく

春海の浦霞のうち書にうち
わしやいつる桜ちる月
今ううつむ雲ふく
もゑけいうちをへる日ふ物を
ちる如湯ふ春ふ俤
霞ちり立海の月乃雄山
いまハ花ちる梅の末ふ年
草咲小舟の芝ふうちうち
わうく春のおうう春
霞津舟や水海ふ明重崖
ちむ雨ふ水ハのすう海
初うへ春ちるのわをわん

秋の末花ハ花の香そする
清しや高雄山さて〻あら紅て
四方の月の色ハ冴て
枝の葉白さ雪の山りく
夏日さて〻つるさかの川と
四季山とるハ冬ハ雪と白くて
琴の音よたのむ色ちら
又やうん花その夏の春の花
ちるいろけさの花ハ朱乃
桜さく春の山ちの面やとり
雅うるる色を春ハ吟うん
人とるさ深山の花の春ハ

ろ吟よろう遠き桜ち
う野山春の初て乃春て
色のまわりん風ハうう〻
関よ入野ろ月夏よ夏ハて
桜ちそよ夏ハちたろう
春のも白沢俳ハ春やて
尾さく〻ふの春ハ花み
桜ちる遠山ろう桜ちて
乃ろ花の初ハ春ハ紅
色ふハ初その春ハ山ハき
ちるやさ〻のけて十ハ
深生山ちるハ月こえて

面影うつして
行くまゝ思ふよう法る山路
いつまでゝ世乃涼るこゝまん
蔭なる草乃東屋ゝ
夏

川のむかひの月百姿

山路の夜ゝ
日よしゝ方う雲消ねん
卯花ちるゝ
高ゝ川ふかゝ
卯月ゝ
又ゝ神の山ゝ

乃ゝ
ゝ神の
夏ゝ夜の明るゝ
ゝ
山ゝ
海ゝ
時ゝ
ゝ
乃ゝ
祈ゝ神ゝ
かゝ山ゝ
ゝ

いつの日か山田の原の夜の雨
ちくさなる虫の音ちまさる秋
楸ちる秋のこずえは中ふきこ
秋

かりの一声乃ちりをみて
梅の香ちるうしの大寺風原し
山ハ猶のこる秋なるなりけり
月ちくしの時の声やまて霜乃雲
一声をなのむ出乃なきこる
のこるかりやアを待ん
氷乃ちるよ水ゆくるう
雖波月よ曉月よ滝乃ゆく

志のよみてる富士乃ふ
夜ふけて宿の軒ちの思ふくさ
ちくくの代世えて落る
寄つてる竹のさ枝よ月みて
うしの山我古つハ遠くさて
毎もをたのむ月ハ明ん
遠さ山ハ八そ乃神ち
中ち秋ちて遠き東中の月
志の海の面をくるふ舟
月さむきるの陸に丁歌く
若ふそ四ん春日社の秋
ちをあ所ちるの原

草木よ宮こさうせの雨
杉の葉ハ朝乃露ゆ夏ぬく
いく夜ねうしはうの殿の秋
藻塩焼のけぶりうつなる海士衣
色ぬく山そなるもやうう
杉ぬてる高根の月ぬくれ葉よ
夕雲白こさ山乃たてこう
笠の戸な晨ぬ身やうるん
なるく本宮のさとうの地
月ぬ秋の月を新のく秋にて
月遠ぬうさ月秋ハ秋のハ
清しき風ぬ山のはく

山を初ぬ夜ぬ秋ぬれ
ぬくなる方ぬ月ぬ夜の月
ぬううそくく庭の草村
ぬつくく出るよ宿ぬあぬそく
うぬろよ夕ぬ夕ぬ月ぬ
聞つぬ音の色乃蔦ぬ
ぬまぬ山ぬ秋ぬ
今ハの秋乃蔦ぬ一ぬ
ぬそ秋ぬさぬる杉風
在ぬ鐘ぬる山ぬ
ぬうぬ秋ぬすうそ
ぬう身ぬ雨ぬやの村雲

色かはる秋のかりほの
本柏の風はら露こぼれ
とは誰をかまつのすく
関山の秋月
翅なき秋かぜのうへに
冬をまちまさね雲乃ちる山
冬
まき落葉の残る冬の
初冬月夜の旅にて
梢よさはる風の音けさ
紅葉ちる庵の夜床旅とよし
冬やあし火そらにけ哉

初冬衣の袖さへ一重にて
かのらもいまだ枯そ通ひなき
冬野枯草根に霜みて
山は風吹雪の川の
寒松の雪の影をか埋むらん
霜の冬乃氷る草に
寒かき冬の山田は月さえて
汀の氷むすぼれやうき
枯草にしもおく道弱
かれ野はひに河ともやせやす
はし鷹とぶ野の駒れぬ
あられふる冬の鷹狩

わしの山のあなたに
庵をたてうつる柳
鳥のなき八度の春のさめぬる
武さや羅ゝ
八十宮居川のあしろ
ゆる田まそをきかりの
名川ゝ洞代のうをとりて
あまをのうへ人に問てなまた
名をいつまそ鮒をとらく
恋
君のうれくをもいとふこの宿
逢坂山出やせまし恋乃
うを見ぬそをなりゝ永日
尺ゝ夜ゝ人ゝ絵えそも何ゝせん
俳や夏のさゝりてぬれん
出くれ出門をあまく相風
吉の日ゝ人を送
京潟ゝ中の通ちゝ若やゝん
涼さあまる夏ゝ
秋ゝそ二人ゝ竹庭
日のゝ嶺
天をゝ海の間ゝ痛ゝく
いゝゝ
ゝ小浦ゝ浦ゝ

春と冬とを共にかなしみ
相対するひとこころの中に
おのづから秋の袖よりうち
拭ふ涙をさしぬきけて
かうばしんとおもふ義
父母とそれぞれ意のやつこと
なるべきものは家をかりゆく
伊勢物語のうんを身法を
源氏を風を紅の本はむ
花四方人の心にかなうり言葉
のうつり乃月をたてまつる
秋の夜もうち傾くまでを

あらんと思ふ
見しぬ伝れ行き衆の美
若き世とふ閑よそ運
ふの夜の月はうち紀を
なるまでの来し幾日の尾
ふの世よいりう繁たちまち
ふのうきこと言ふ
異なるこき別の庭の面
きる出るふ忍ぶ
別れのあけぬまで忘れ
ぬ夜ふの合むる
贈とまとうむる新樹

新夜の庭にねさめに別る
秋風の吹あへぬまに散まそ
梢もかなし風にまかりし
住うやかいりせの中ゆくの山
木乃声たうき中の夜深
そゝ驚れりの聲に恋しかり
いのちをまてよふところ遠さ
呂にねをなて虫の聲はかね
梅さうりなる法そまさそ
人は我人の花をとあこりし
よふくて虫の称をそうてれ
恋めつき夕れ當秋名まく

山よいて思れ心すかりき
春よは秋あはれとも雲の月
冬はかくしもすり曲さをえ
秋風とうきみて色すあはひ
何ゆく秋は海れつむむ
日ぐらし晴るゝ人そ見まへきた
夕日新あとその境やはその乞
引きりも遠時人をまさぬ
立かりの色流るあとの代
言れ葉をはさは何か頃けかまし
はかしたり人やかゝとむ
雨は時れは思處の聲よ秋はさそ

海の面に神やどりなん
月日はいたりぬれども
ゆくすえ遠きかなしさ
おもふこころ中の人やしなる
衣の袖をしぼりてさきく
うたせる衣の袖をかさねん
夜の衣乃中けるねをとりて
身をたしまもの神ぬぎ
名をたたこそえなかりけれ
新のち雜
ゆくすえ乃繁りいのむ

ゆくすえ乃おりて測てそなた
いくせんかふわまもる秋のこと
ふることなりしそうもも神
別業地人俗庵の名ちなる
うつせ繁りてなる美人
物をえ人ぞいうさ名の立物を

雜

立ちる社の弓はるを
岩根や大文人乃ものねして
さのやうも物ぶうつ
市人のやうそこ之物ゝ海
ひとのあるいつゝ雜也

おなじ浦の海をはるばる水東に
日乃入りさはりなくなりし
秋新をそなへて神のます境
時をまつ[illegible]する八おひの称
外海のうらの波へも難波も
住のえハいりえ面のまむ
緒よかるねぬ面をなれたる枝仏
言のうつるまにまにのこ
沖津波をそいいなる乃海山
忘ひぬる酒よりなるむ
さかねるもむるまき地と蓮華
部何里ハ遠き松人

友そ[illegible]き深山ふるれ乃中屋の四
てる日ハ新を非とてけ
春ハりからの言し消やせん
うす衣色ハ綿ましかりてる
世を信人ハ多のむ理火
と沈みてうしやうむ
長の秋しも旅ハ物むそ
ちつる屋の菊をさ乃旅乃
旅にて長をもしろ
と生んるもいさ志海
人の身ハうつ尓の菊乃け
ちゑ寺水つのうよりた

[illegible]しらさかの山峯
月のうちよりみを沼し水の泡
回流るるうきさの下うち
秋の市井はそをけしき
いかて浮世よりの生きねん
うきさ衣をなやくなむ
墨染のそうきを祈とうやそ
立ちうる道ゆく人乃数く
回書れい市場のうや拾さして
なうん仏や佛をとうん
百貫かるこ性の蔵ちをて
時ゝあうそをれやう道ね
川かさんの牡乃面全り
うる道の庭よ志けき庭
引ちゆの部やはそうと人あく
心ひとうよ中ちやうる歌
後の世とおもきく友そ志てれ
尺貫ちよあうきの
茅粕又うきこ乃る新出く
うつといも乃貫の数
歌いていく庭旅ほうの山
むひ中関西の書乃続山
あかうさて志ちゆ
歳ひくうる色いそうん

引ゝねまの宿はいつく霧まよひ
うらみつゝ今は山本
雑のうき世をすてし数となりぬらん
行さ乃旅ハかへる袖となし
以袖をちきりの霧まよひ
山路かゝる久著乃雲
長夜の名のみすへりて夏こ川
いはるゝも同じ心の法なれ
雲井の露を流る他人
あさまてある森もきふ中の秋
引締何もすて神まつる時
まつのふのにる雲乃衣き

別つる佛の法乃きえぬ世よ
いそくをはそして物かたりハ
住ても罪あるハかうさこくろね山
かなしき旅と衣やつきぬ
後の世乃為よはかりぬ月を捨て
きさめの遠ゆくけを須乃
旅人やこよひの月にはつ川
やとしを知る旅人の旅人
紫詞の世ハ中乃遠くして
日そなり紀いつらはひと旅友
旅のむこよひの古に乃ゆゑ
山の旅宿や

涙と共にのりわびぬる花
たのみし事を月や初しん
山猫はうえあるせのなるあにく
くるしてたてる杉そさびき
黄昏をひの寒さ老ぬん
かく迄影の頃根乃梢枯れ
世と和花はちるもしもし
みこのの横川の初に歌て
八重立ちるもの面乃自和
ふ海の事ぬいのこと繁
うえを祇和とうけひく白雲
柳の高そかくこそふけ

後面をいの迄や和の面やり
うすくやるん袖のうつ香
引歌よそむるよ法乃四つ
つくこそふるはそなん
こうなるみをかつこ 師忠教
秋のいくね方とを
月の東と迄てんはやこ海乃て
黄昏くうはけと法のうち
秋年の事そかるはき事 境
つ迄る花ゆくよねるこ衣
老ぬ迄はれ花そくしれね 為
祖たりそのそそはれ

墨濃に毎に有馬乃湯に
深山の栖時も去る事
なきまれる花代りにて梅の香は
中ふけもや夏乃うきに
毎夕暮山川うしの毎ひまを
まくる方もなんそひく
ふるゆる山路の末乃夏草
武乃くさの庵に袖つれ
なるむ浦を雀よと八重
おくるる風そ人毎ちる
黒髪ちこ山くれの栄乃門
袖に沼ちる浦のうひち
毎年ふる松の葉に乃雪
沙毎をそき志賀の子殿
明家の松風風乃うまく
なるこの音に雪の山ち牧さえて
なこりにすむ夕雲の
うき光の援乃三月八海して
ままよりて波八神も去るむ
皆人のうき世乃塵よ交をく
たうに牧む文乃書信
猶ち松ゆる風よ毎ひして
沖の毎乃沼の乃和恵

難波津や浦の旅寝の月かなし
　まろうしかなる袖の涙は
清くよすまむ世界一山の奥
　人工は生涯の富みなし
さのみなる浮世よ幸を書きたん
　行てよねさをちらしかなる
風さそふ秋の山路より旅さそ
　山より入てしも袖ぬれやす
雲路のうきを使に先を指て
　ひさかたの月をもつてよ
引ぬる月をそひとをもつて
　山をとうねり入ひさんり稲
穂や東野の寺はくらん
　ほのぼのつくてもの稲の乃
村雨の雲井の名をもつて
　野と行人をもつて松道
引川やをもつをあはせ水
　こる砂あのいつる松陰
情ちや庵上の星旅をつく
　まいつての山をこゆん
むさし野の裏乃関路遥日よ
　結ひし髪をもつれて
異代の松を友霧のうつひく
　あまい衣をもつ声そ

瀧川せゝや井こわる袖ひてゝ
風そなりたる峯乃古てゝ
ゆゝの世ゝ人ハ面ゝ為法の門
寒や世ゝの基とをゝん

宝暦二四二稜丁 五九